

●研究ノート

「武蔵野モダニズム」構築への試論 ——都市・建築の地域文化性を手がかりに

玄田 悠大

目次

1. はじめに：問題意識の所在
2. 対象設定：「武蔵野モダニズム」の地域的・時代的枠組み
3. 武蔵野台地の地理的特性
4. 1900年前後：国木田独歩『武蔵野』などの表象による文化的風土の
発見・共有
5. 1910年代：キリスト教系大学校建設計画を起点とした東京圏における
郊外住宅地開発の萌芽、海外からの田園都市や新教育といった理念の受容
6. 1900～20年代：田園都市構想の受容と展開
7. 1920年代以降：新中間層の勃興や関東大震災を契機とした郊外住宅地
開発の増加と大正新教育実践校による教育運動型学園町の形成
8. 1920～30年代：風土に根ざした近代建築の実践
9. 1940年前後：武蔵野都市計画等による理念郊外の制度的基盤化
10. 結論：「武蔵野モダニズム」構築と歴史的環境保全に向けて

キーワード

モダニズム (modernism)
武蔵野 (Musashino)
郊外住宅地 (residential suburb)
近代建築 (modern architecture)
都市計画 (urban planning)

●RESEARCH NOTE

Towards a Framework of “Musashino Modernism”:
Regional Cultural Dimensions of the City and Architecture
by YUTA GENTA

1. はじめに：問題意識の所在

近年、歴史的環境の保全は、個別建築の保存にとどまらず、面的な広がりをもつ地域全体を対象とする傾向が国際的に強まっている。米国の Historic Districts、英国の Conservation Area、UNESCO が提唱する歴史都市景観 (Historic Urban Landscape)、ICOMOS の各種原則、さらにはフランスの保全制度などは、その代表的な枠組みである。これらの制度は、それぞれの地域に固有の文化的・社会的条件を踏まえつつ、都市や地域の歴史的価値を面的に捉え、保存と活用を両立させてきた。

一方、日本の制度は景観法や伝統的建造物群保存地区制度など一定の整備をみているものの、近代以降の郊外住宅地や新たに形成された地域の歴史的環境を面的に保全する枠組みは十分に整っていない。ただ、それらに類する地域や建築では近年その環境が解体される事例が後を経たないことから、対策が喫緊の課題である。そのため、制度面の補強と同時に、その地域の理念や文化的基盤に根ざした概念的枠組みを構築し、社会に周知していくことが求められる。以上より本稿では、後者である特定地域の歴史的環境保全につながる地域性の概念的枠組みの構築を図る。

2. 対象設定：「武蔵野モダニズム」の地域的・時代的枠組み

本稿が対象とするのは、1920 年代から 30 年代にかけて形成された東京西部・武蔵野台地（図 1）を中心とした地域である。同地域では近代以降に開発された郊外住宅地や竣工した建築の環境保全が顕在化しており、その形成期は概ね 1920 ～ 1930 年代に位置付けられる。同時期の他事例としては「阪神間モダニズム」¹がよく知られ、六甲山麓の風土と西洋的生活文化の受容を軸とした地域形成に基づく地域文化として広く認識されてきたが、武蔵野地域においてもまた、これに比肩しうる独自の文化的基盤が存在していたと考えられる。しかしながら、その包括的な把握は十分に試みられてこなかった。近代に形成された都市・建築を中心とした地域の独自文化を捉えることは、何を保全・継承すべきか、そして今後の歴史的価値に紐づく地域環境をどう

¹ 阪神間モダニズム展実行委員会編著『阪神間モダニズム：六甲山麓に花開いた文化、明治末期―昭和 15 年の軌跡』（淡交社、2004 年）。

構想すべきかを明瞭にする上で重要である。武蔵野地域の地域性に焦点をあてた研究としては、山口廣、山根ますみ、樋口忠彦、玄田悠大²に限らず、東京郊外としての特徴に着目した様々な研究・文献があるが、それらの多くは個別事例に焦点を当てたものが中心であり、モダニズムに関する広域的な地域文化性に着目した研究については、今後の調査が待たれる状況にある。また、同地域においては、武蔵野ふるさと歴史館が企画展「武蔵野の文化住宅とモダニズム建築」³を開催し武蔵野市域にある近代建築の一部を紹介しているが、必ずしも地域性に依拠した結論を導いているわけではない。

このような背景を踏まえ、対象を時代と地域の双方からより具体的に設定する。まず、時代について、都市や建築に関する近代化における用語として「モダニズム」が最も適切であろう。「モダニズム」の定義について、日本国語大辞典では「日本の文

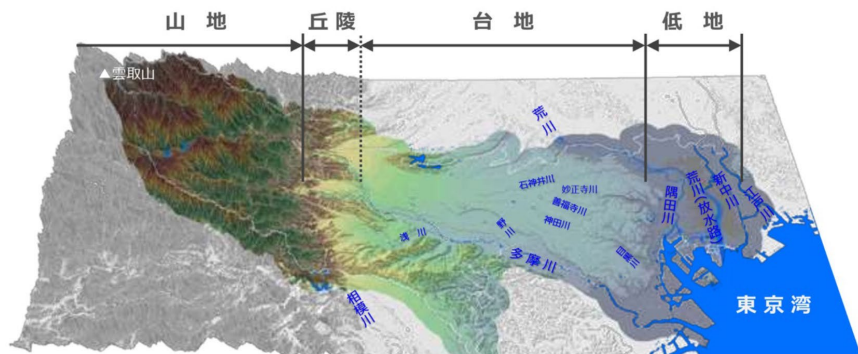


図1：東京都の地形鳥瞰図⁴

² 武蔵野地域の地域性に焦点をあてた研究として以下が挙げられる。山口廣編『郊外住宅地の系譜：東京の田園ユートピア』（鹿島出版会、1987年）、山根ますみ、篠原修、堀繁「武蔵野のイメージとその変化要因についての考察」、『造園雑誌』第53巻第5号（1989-1990年）：215-220頁、樋口忠彦『郊外の風景：江戸から東京へ』（教育出版、2000年）、玄田悠大「教育運動型学園町の地域形成理念と歴史的環境保全：大正新教育実践校を中心とした地域を対象として」（博士論文、東京大学大学院工学系研究科、2025年3月）。

³ パンフレット「武蔵野の文化住宅とモダニズム建築」（武蔵野ふるさと歴史館、2019年）に各建築物の説明がある。

⁴ 中央が武蔵野台地。東京都環境局ウェブサイト（2025年9月30日アクセス）を参照。
https://www.kankyo1.metro.tokyo.lg.jp/groundwater/1227/pdf/Sustainablegroundwater_1_3.pdf

芸・美術などで、大正・昭和初期に、欧米の思想・芸術理論・様式などを積極的に摂取して、現代人としての新しい感覚の表現を主張した運動・傾向。近代主義。モダン派。また、一般に現代の流行や趣味に合わせようとする傾向をいう。当世風。新しがり、デジタル大辞泉では「1 現代的で新しい感覚・流行を好む傾向。新しがり。現代風。当世風。2 文学・哲学・美術などで、特に20世紀の初頭に興った反伝統主義の立場に立つ諸傾向の総称。未来派・表現主義・ダダイスムなどを含む。日本では、大正末期から昭和初期にかけての新感覚派・新興芸術派などにみられる、文学・芸術上の一連の運動。近代主義。現代主義」と説明する。これらより、モダニズムとは総じて、大正・昭和初期における新しい感覚の表現を主張した運動・主義と簡略できる。したがって、本稿は大正から昭和初期を中心とする時期を対象とする。

次に、地域について、本稿は武蔵野地域の地域性を扱うため、対象は東京西部の武蔵野台地であることは自明である。加えて、後述の通り、国木田独歩が文化的表象として描き出した「武蔵野」が重要な要素となる。よって、独歩が「武蔵野」として認識した武蔵野台地上の地域を分析対象とするのが妥当であろう。ただし、国木田独歩はその範囲を明言していないため、あくまでも武蔵野台地の一部としての表現となる。

以上を整理すると、対象は1920～30年代頃の東京西部・武蔵野台地の一部において形成された地域的なモダニズムであり、本稿ではこれを「武蔵野モダニズム」と称する。モダニズムに影響を与えた前後の時代も含め、武蔵野台地上の都市・建築を中心とする地域文化を時系列的に抽出し、その特徴を明らかにすることで、「武蔵野モダニズム」の成立背景と文化的意義を都市史・建築史の観点から論じる。本稿はそのための試論として、地域文化を風土・理念・空間という三層の視点から捉え直し、その相互作用を通じて武蔵野モダニズムの構築を試みる。なお、「武蔵野モダニズム」は本研究を通じて設定した著者による造語であり、筆者による博士論文⁵をはじめとする既往研究を踏まえつつ、その輪郭を描き出す試論として提示する。

3. 武蔵野台地の地理的特性

文化的土壌の土台となる景色に結びつく地理的特性を整理する。関東平野西部に広がる武蔵野台地は、平坦な地形と雑木林を特徴としてきた(写真1)。京都のように遠望の山並みを背景とした景色が形成される都市とは異なり、武蔵野には遠景の山並みに欠け、その物理的環境は、足元の自然や近景を中心とした視覚文化を育んだ。身近

⁵ 玄田, 前掲。

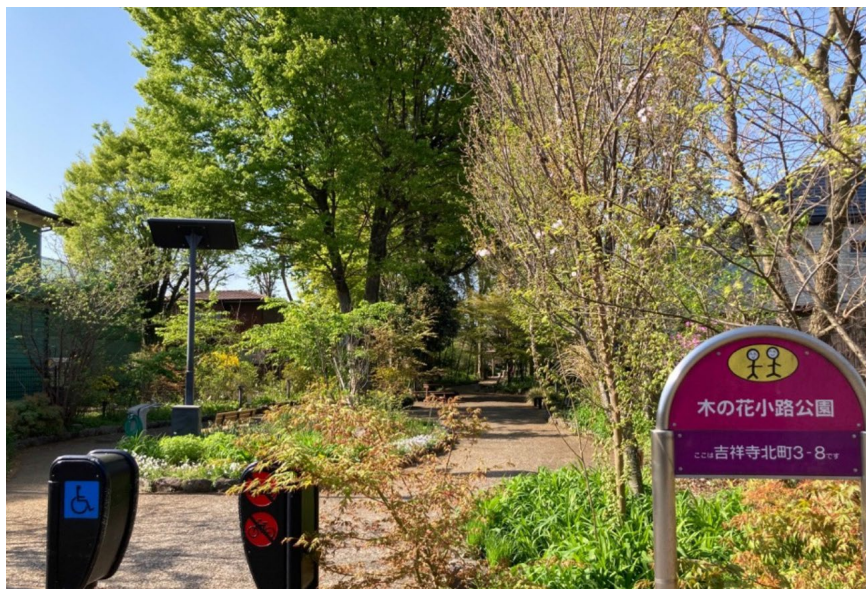


写真 1：武蔵野市／木の花小路公園⁶

な雑木林や畑道こそが武蔵野の日常の景色であり、生活と自然が密接に結びつく景色が生まれたのである。このような物理的環境こそが、武蔵野モダニズムの揺るぎない土台といえる。さらに、武蔵野台地は地盤の安定性に優れており、後述するように関東大震災後には郊外移住の適地として再評価された。これにより、都市化が急速に進む東京圏において教育機関の移転や住宅地開発を促す重要な選択肢となった。

4. 1900 年前後：国木田独歩『武蔵野』などの表象による文化的風土の発見・共有

明治維新によって東京の人口は一時的に半減し、郊外への関心もほとんど失われ、再び人々の意識が郊外に向かうようになるのは明治 30 年代に人口が幕末期の水準を回復した頃で、この時期、人々は郊外を居住の場所として意識し始め、同時に武蔵野の美を新たに発見する契機があった⁷。その発見の元祖は、柳田國男曰く、国木田独歩であった⁸。鉄道の延伸という交通機関の発達と都市環境の悪化が顕在化し始めた

⁶ 筆者撮影，2023 年 4 月。

⁷ 樋口，46 頁。

1898 年、独歩は『国民之友』に『今の武蔵野』を 2 回に分けて発表し、続く 1901 年には改題して短編小説集『武蔵野』として刊行した。この作品で独歩は、武蔵野地域の特徴を次のように描き出している。

どの路でも足の向くほうへゆけばかならずそこに見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武蔵野の美はただその縦横に通ずる数千条の路を当もなく歩くことによって始めて獲られる。

春、夏、秋、冬、朝、昼、夕、夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、ただこの路をぶらぶら歩いて思いつきしだいに右し左すれば随処に吾らを満足させるものがある。

これがじつにまた、武蔵野第一の特色だろうと自分はしみじみ感じている。

武蔵野を除いて日本にこのような処がどこにあるか。北海道の原野にはむろんのこと、奈須野にもない、そのほかどこにあるか。

林と野とがかくもよく入り乱れて、生活と自然とがこのように密接している処がどこにあるか。

じつに武蔵野にかかる特殊の路のあるのはこのゆえである。⁹

独歩は、武蔵野にありがちな平凡な雑木林や農道を歩く体験を文学的に昇華し、武蔵野の美は縦横に走る路を歩くことで初めて得られるものであると提示した。景色とは、山があるから山の景色があるではなく、山を景色として見るから山の景色があるといわれるように、物理的環境と、それを景色として見る見方から成り立っている。この「景色として見る見方」の世界は、価値観の世界であり、文化、文化史にかかわる世界である。景色は、個人の体験であり、その体験を他者と共有することで、景色は共有のものになり、共有の環境文化になっていく。独歩が描いた静謐で内省的な武蔵野の自然は、単なる個人の体験にとどまらず、読者に共有され、やがて地域全体の文化的アイデンティティへと昇華した（写真2）。この文学的表象は、武蔵野を「歩くこと」「日常性」「自然との共生」と結びつけ、その後の郊外像に大きな影響を与えた。このように、平坦な地理環境を有する武蔵野台地に、独歩の文学的表象が付与されたことにより、文化的風土の発見と共有が生じた。これが武蔵野モダニズムの土台の一つと

⁸ 柳田國男「武蔵野の昔」、伊藤整他編『日本現代文学全集 第36 柳田國男集』（講談社、1968 年）所収、152 頁。

⁹ 国木田独歩『武蔵野』（民友社、1901 年）。引用文中の下線は筆者による。



写真2：独歩の碑¹⁰

位置付けられよう。以降、白樺派やプロレタリア文学の作家、さらに芸術家たちが武蔵野に居を構え、文学・芸術の舞台としての武蔵野像を広げていった。武蔵野は単なる地理的呼称を超え、文化的ブランドとしての力を帯びるに至った。その嚆矢は国木田独歩が『武蔵野』を通じて提示した意義の大きさに求められる。

5. 1910年代：キリスト教系大学校建設計画を起点とした東京圏における郊外住宅地開発の萌芽、海外からの田園都市や新教育といった理念の受容

日本における近代の郊外住宅地開発は、1910年の池田室町を嚆矢とし関西を中心に勃興したという理解が一般的である(図2)。東京圏における本格的な郊外住宅地開発は、主に1923年の関東大震災後に集中する。しかし東京圏の嚆矢は、関東大震災より約10年早い1913年に開発された新町住宅地(桜新町)と認識されている。ではなぜその時期に同地で開発が行われたのか。その背景を辿ることで武蔵野モダニズムの一端を明らかにできよう。なお、この開発背景については2023年の玄田悠大¹¹の

¹⁰ 筆者撮影、2019年12月。三鷹駅前に1951年3月に建立された独歩の碑。碑文は武者小路実篤。

「武蔵野モダニズム」構築への試論：都市・建築の地域文化性を手挂かりに

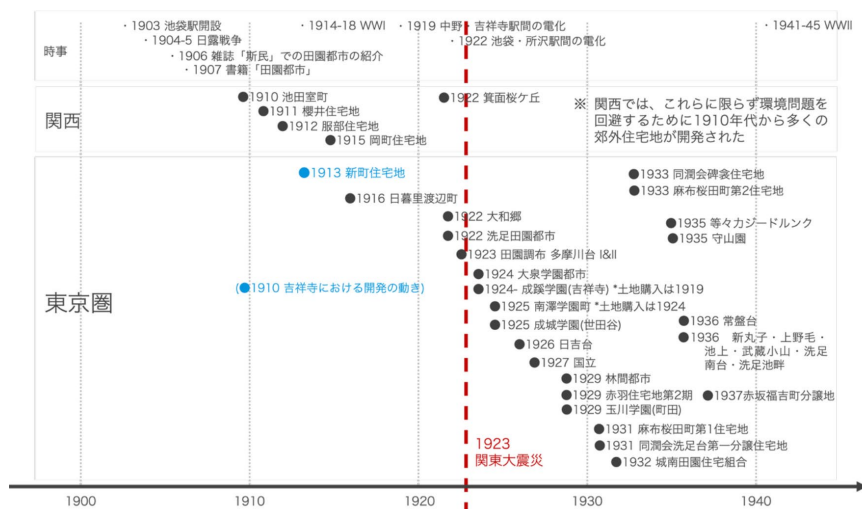


図2：近代の郊外住宅地開発¹²

研究があり、以下では特段の明記がない限り、同研究をもとに概要を整理する。

(1) イエズ会の学校建設に起因する地所取りまとめの動き

1910年12月9、10日付け『朝日新聞』の記事「一大地所の紛擾」には、「去四十四年九月中ゼスイット〔イエズス会〕羅馬本部は日本に一學校を設立する目的を以て米人ロクリップ〔原文ママ〕を派遣し地所の選擇に奔走せしめたる模様〔……〕ロクリップは本年の春帰京〔帰郷〕し後事は獨逸人ホフマン氏が引継ぎ居れり」と書かれている。記事によれば、学校敷地11万余坪の売買をめぐり、府下荏原郡駒澤村深澤府会議員谷岡慶治他50余名とロクリップの代理人と称する人物との間で契約が破断となった。土地は、「府下荏原郡駒澤村字世田ヶ谷、新町、深澤、玉川村字瀬田、用賀、下野毛、野良田の六ヶ村に跨り総坪十萬八千六百三十九坪」とされる。1909年秋頃、押川方義はロクリップと会談し、日本にも教会付属の大学を設けたいので協力してほしいという依頼を受けた。押川氏は懇意の谷岡に駒沢村あたりでの候補地を打診し、谷岡は地域で調整を試みたがまとまらなかった。その後、押川氏は別に同郡

¹¹ 玄田悠大「成蹊学園取得地（吉祥寺）の開発経緯：成蹊学園取得前（明治43年（1910）～大正8年（1919）」、武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館『武蔵野ふるさと歴史館だより』第11号（武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館、2023年）：2-7頁。

¹² 筆者作成。青字は東京圏で早期にあった郊外住宅地開発の動き。

武蔵野字吉祥寺駅付近の地所選定に着手し、谷岡も地域での交渉に引き続き尽力した。しかし、いずれも契約には至らず、結果的に邦人間の紛擾となった。最終的にこのイエズス会学校計画は、1913年に四谷で開校した上智大学として結実する。したがって、前掲の土地は、大学の設置には至らなかったが、まとまった土地として残されたことになる。

荏原郡駒澤村及び玉川村にまたがる地所はその後どうなったか。そもそも1896年に谷岡が創立発起人の一人を務めて玉川砂利電気鉄道の出願が出され、1902年に玉川電気鉄道と改称し、1907年に新町停留所が開設された¹³。同時期、1903年に東京信託社が創業され、1906年には同社を母体に東京信託株式会社が創立され、谷岡は玉川電気鉄道および東京信託両方の相談役を務めていた¹³。さらに1908年には谷岡が誘致した園芸学校が駒沢村に開校している。また、1908年8月20日の朝日新聞によれば、東京府第二尋常師範学校敷地がいったん池袋と決定したものの撤回され、改めて敷地を定める流れとなり、池袋派、八王子派、世田ヶ谷派の各派が争い、世田ヶ谷派では谷岡慶治が表に立って運動していたという¹⁴。このように谷岡は鉄道や施設誘致を通じて地域発展を主導しており、土地の取りまとめ実現可能とする立場にあった。

大学誘致の騒動後、谷岡は1911年に東京信託へ、のちに桜新町となる土地を売却¹⁵、翌1912年には谷岡は玉電新町停留所の南へ入る街道の両側に桜を植樹し、一大遊園地として新町の発展を促す計画を推進した¹⁶。この桜並木が植えられた場所は前述した関東最初の郊外住宅地・桜新町と新町駅とをつなぐ中央通り（現・サザエさん通り）である。東京信託は1912年に宅地造成を開始し、1913年に分譲を開始した。新町住宅地は、駒澤村大字深沢字正永、字西山及び玉川村大字下野毛飛地字深沢原の約23.5haの原野を切り開いたもので¹⁷、桜新町駅と園芸学校の間に位置し、谷岡が大学敷地として取りまとめた土地があった地域の中心部にあたる。大学誘致が破談となっ

¹³ 為国孝敏、榛沢芳雄「玉川電気鉄道の変遷と東京西南部地域の変容との関連についての一考察」、『土木史研究』第13巻（1993年）：221-231頁。

¹⁴ 「第二尋常師範敷地問題」、『朝日新聞』1908年8月20日付け朝刊（朝日新聞、1908年）、朝日新聞クロスサーチより。

¹⁵ 深沢・桜新町さくらフォーラム編『深沢・桜新町100年史：新町住宅地の分譲開始から100年私たちのまちは、こうして形づくられました1913-2013』（深沢・桜新町さくらフォーラム、2015年）、7頁。

¹⁶ 佐久本武雄、長山長編『世田谷区勢総攬』（区勢調査会、1934年）、30頁。

¹⁷ 深沢・桜新町さくらフォーラム編、12頁。

た地所は、谷岡の関与のもと、東京信託による宅地開発へと転用されたと考えられる。

一方吉祥寺では、近年発見された高橋亀三郎（第5代武蔵野村長）生家所蔵史料¹⁸によれば、1910年に地主たちから阿波松之助の豊里合資会社に約10万坪がキリスト教系大学校用地として一括売却された。しかし、同大学校は建設されず、最終的に1919年に成蹊学園が取得した。この吉祥寺の土地は、時期、規模、用途、キリスト教関係といった条件が、前述のイエズス会計画と一致しており、大学誘致のために取りまとめられた可能性が高いと推察される。

以上のように、イエズス会による大学誘致を契機とした土地集積は、実際には教育機関設置に至らなかったが、その地が後年の初期郊外住宅地開発や学園町形成へと直結した。この過程は、東京圏における郊外開発史の重要な前史と位置付けられる。

6. 1900～20年代：田園都市構想の受容と展開

1900年代、武蔵野地域ではまだ郊外住宅地の開発には至っていなかったが、英国発祥の概念「田園都市」が日本に伝達された。イギリスでは産業革命後の1900年前後、ロンドンの環境悪化を背景に、大都市から産業と人口を郊外へ計画的に分散させる必要が高まった。こうした状況を受け、エベネザー・ハワードが1898年に著した*To-morrow: A Peaceful Path to Real Reform*において田園の中で独立した新しい理想都市「田園都市」を提唱した（同著は1902年に*Garden Cities of To-morrow*に改題）。田園都市の特徴は、「都市と農村の結婚」とも称される、都市部と農村部の利点を融合させた点にある（図3）。すなわち、都市環境と自然環境を調和させた新しい都市空間、都市的生活と農村的生活の共存による地域還元型の都市経営、都市型コミュニティと農村型コミュニティの融和を通じた自立型の協同的コミュニティ形成を目指すものであった。

ハワードが計画した最初の田園都市は、1903年にロンドン郊外に建設されたレッチワース（図4）である。レッチワースは、幾何学的な区割りや統一感のある建築物に加え、クエーカーの教会や、のちに新教育連盟へと発展する神智学系の学校など、

¹⁸ 高橋亀三郎生家所蔵史料のうち、成蹊学園取得地に関するものは以下の通り。協議事項、承諾証（1910年7月31日付）、土地売買契約書（下書き）（1910年9月付）、土地売買ニ附随スル特別契約書（下書き）（1910年9月付）、領收證（地上物件含む地代金、1910年10月4日付）、領收証（特種土地増加代金建物新材農作物取拂ノ補償金、1910年10月4日付）、地上物件損害補償調、豊里合資会社諸税現金受拂簿、大正五年度効公課金徴収簿、東京府北多摩郡武蔵野村大字吉祥寺字野田北測量図。注2の玄田の博士論文も参照。

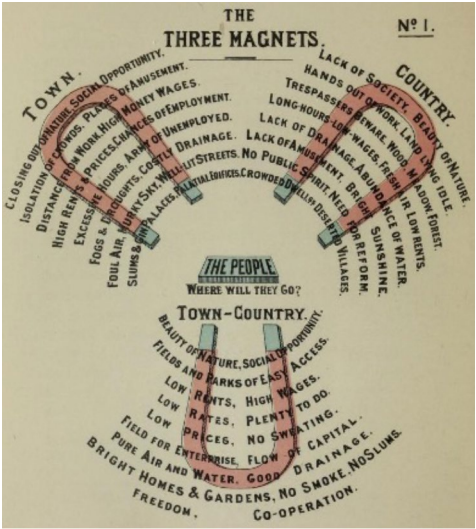


図 3：3つの磁石¹⁹

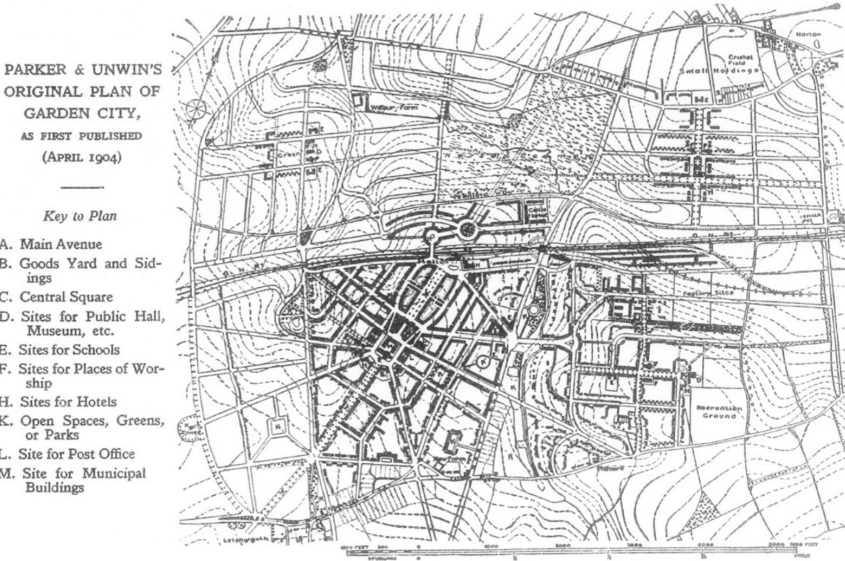


図 4：パーカーとアンウィンによるレッチワースのレイアウト（初出：1904 年春）²⁰

「武蔵野モダニズム」構築への試論：都市・建築の地域文化性を手がかりに

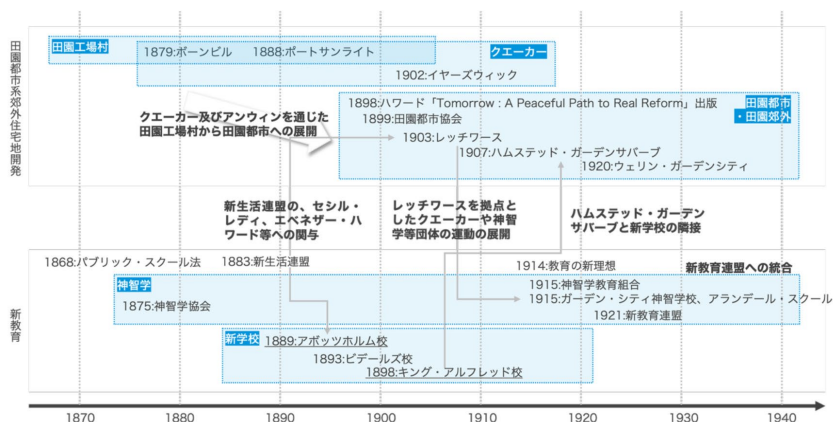


図5：イギリスにおける田園都市系郊外住宅地開発及び新教育の系譜²¹

都心部では受け入れられにくいコミュニティの施設を包含していた点が特徴であった。さらにイギリスでは19世紀にはボーンビルなどの田園工場村が建設されており、その関係者がレッチワース開発に関与するなど、田園都市構想の下地としてコミュニティや設計思想等の展開が存在していた（図5）。

日本における田園都市の受容の端緒は、調査の結果、1905年、内務省地方局・井上友一による兵庫県加古郡「学校園」（図6）の紹介記事が、日本で最初にGarden Cityを「田園都市」と訳して使用したケースと判明した²²。これは「教育」の文脈での紹介であり、日本では田園都市の教育的側面の受容が嚆矢となった。その後、内務省地方局関係者は内務省地方局有志著『田園都市』や雑誌『斯民』などを通じて田園都市を紹介し、やがて地方改良、すなわち富国強兵や国民の健康増進に資する枠組みとして活用できるという理解へと変化していった。

¹⁹ Ebenezer Howard, *To-morrow: A Peaceful Path to Real Reform* (London: Swan Sonnenschein, 1898)

²⁰ Charles Benjamin Purdom, *The Garden City: A study in the Development of a Modern Town* (New York: Garland Publishing, 1985), 42.

²¹ 筆者作成。

²² 日本における訳語「田園都市」の初出及び学校園に関しては、玄田悠大、中島直人「社会改良運動を通じた田園都市の受容過程：内務省地方局関係者による田園都市をめぐる言説に着目して」、『都市計画論文集』第60巻第3号（2025年10月）に詳しい。



図6：学校園²³

一方で、自然と生活の調和を志向する田園都市の理念は、武蔵野台地の郊外開発に強い影響を与えた。田園調布、大泉学園、南澤学園町など、武蔵野台地上に形成された郊外住宅地は、田園都市の理念の一部をそれぞれの文脈で実践したといえる。田園都市の導入とはすなわち近代化の導入に結びつくものであり、その受容は単なる都市計画技術の移入をこえて「理念的実験郊外」としての性格を帯びるに至った。

7. 1920年代以降：新中間層の勃興や関東大震災を契機とした郊外住宅地開発の増加と大正新教育実践校による教育運動型学園町の形成

(1) 新中間層の勃興と関東大震災後の郊外住宅地開発

大正期以降、俸給生活者に代表される新中間層が、都市における新しいブルジョワジーとして台頭した。彼らは清潔で近代的な生活を志向し、都市中心部の喧騒を離れて郊外の衛生的環境に住まうことを望むようになった。さらに1923年の関東大震災は、都心の脆弱さを露呈させ、新中間層の郊外志向を強める契機となった。特に強固な地盤を持つ武蔵野台地はこうした需要に応える格好の場であった。鉄道網の発達により都心へのアクセスが改善されると、武蔵野台地上では郊外住宅地の開発が急増した(図7、図8)。その中でも、教育機関と住宅地が一体となった学園町は、中間層に

²³ 兵庫県加古郡編『加古郡誌』(臨川書店、1985年)、279頁。

「武蔵野モダニズム」構築への試論：都市・建築の地域文化性を手がかりに



図 7：1910～1930 年代に開発された東京近郊の代表的な民間開発型郊外住宅地²⁴

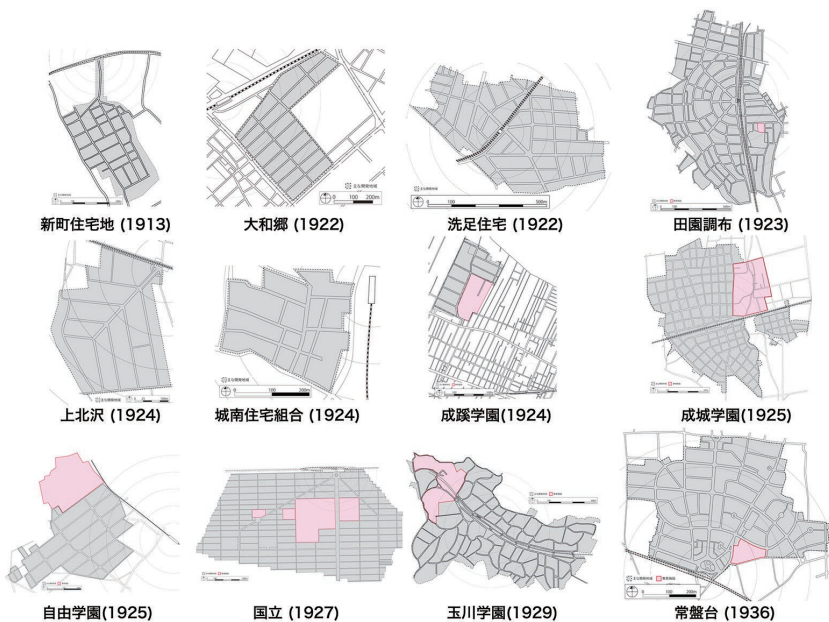


図 8：1910～1930 年代に開発された東京近郊の代表的な民間開発型郊外住宅地²⁵

として理想的な生活環境を体現していた。

この動きに基づく代表的な地域として吉祥寺駅周辺(図9)が挙げられる。同地では1917年に井之頭恩賜公園が開園し、1919年には吉祥寺駅まで鉄道が電化し、環境・利便性が向上した、1920年代には大正新教育実践校をはじめとする教育機関が相次いで開校し、住宅広告には「吉祥寺ハ天然公園トシテ關東唯一ノ恩賜公園ガアリ、地形上田園都市、學園都市トシテ郊外随一ノ最適地ナルコトハ何人モ争ハザル所」²⁶と記されていた。吉祥寺は、住宅販売等で学園都市と文化の良好なイメージを付与された。その後、白樺派やプロレタリア文学に影響を受けた文士や文化人が居住し、文学・芸術への情熱と、大正デモクラシーに裏打ちされた自由で人道的な思想を持つ地域へと発展していった。

(2) 大正新教育の広がりと学園町の形成

新中間層に受け入れられた教育が、大正新教育であった。大正新教育は、既存の画一的教育に対抗し、自然環境等による情操教育を重視する理念を有していた。その中でも成蹊学園・自由学園・成城学園・玉川学園といった実践校は、郊外の自然環境に囲まれた土地に校地を求め、隣接して住宅地を開発し、学園町を形成していった。

特に、成蹊学園(1919年土地取得、1924年移転)、自由学園(1925年開発)などは、教育理念と都市形成を結びつけた象徴的事例である。成蹊学園は、池袋から吉祥寺駅に程近い場所へ移転。開発に先だって、成蹊学園創立者である中村春二には、田園工場村「ボーンビル」への憧憬があった。結果、約10万坪の土地に校地、分譲地、別荘地等を設け、近代的・先進的な学校施設群や並木・道を中心に整備した別荘地的空間を形成し、良好な教育環境の保全に努めた。一方、自由学園は、理想社会を求める理念に共鳴する人々のコミュニティが形成され、フランク・ロイド・ライトの設計思想を受け継ぐ遠藤新らの建築群と立木の風景が学園町の空間を形づくった。教育機関自らが住宅地を開発するような事例は、「教育運動型学園町」と呼ぶうる独自のモデルであり、オルタナティブな開発様式を示していた。

大正新教育は、世界的な新教育運動を背景に、従来の中央集権的・画一的な教育への対抗として模索された性格を持つ。教育者や建築家、住民の一部は、郊外において理念に基づく生活と空間を築くことで、近代化の在り方に対する静かな対抗や補完を

²⁴ おめ通ウェブサイト(2025年5月1日アクセス)の掲載地図を用いて筆者作成。

²⁵ 筆者作成。地図の凡例は以下の通り。灰色：開発地域、桃色：教育施設。

²⁶ 「(広告)大日本信託株式会社 吉祥寺出張所 住宅地」、『朝日新聞』1925年7月5日付け夕刊(朝日新聞、1925年)、朝日新聞クロスサーチより。

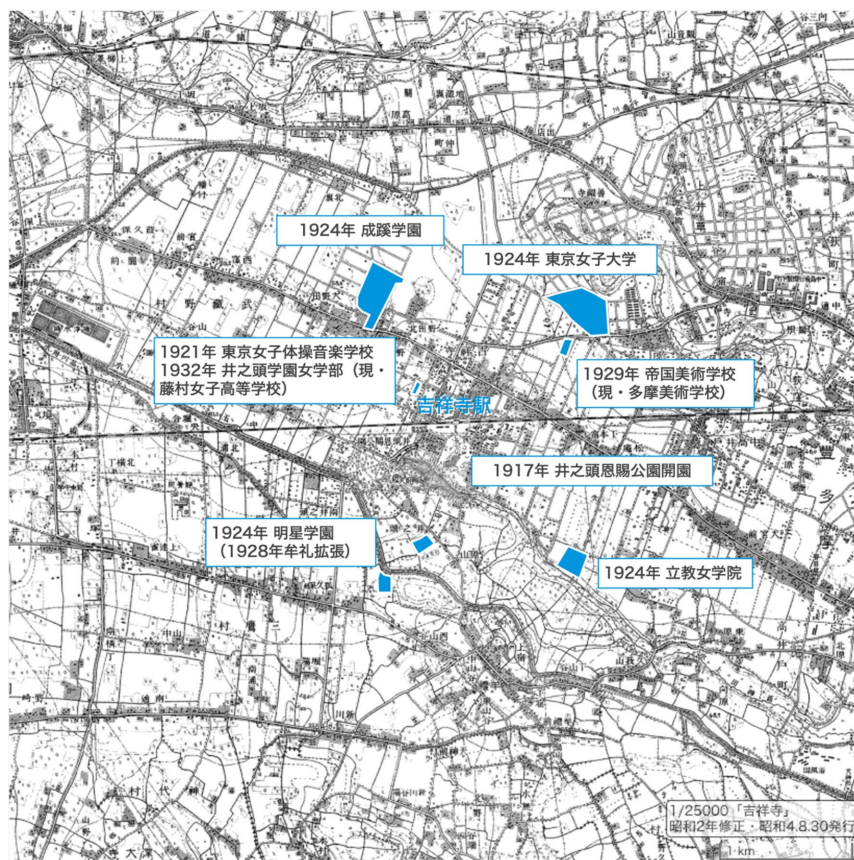


図9：吉祥寺駅周辺（1927年頃）²⁷

行った。これは制度に依存しない文化的対話の試みともいえ、その在り方自体が武蔵野モダニズムの特徴に位置付けられる。

こうした武蔵野の学園町や文化住宅地は、欧米的理念を翻訳しつつ、日本独自の地域性と結びつけた「実験郊外」であり、教育者・建築家・住民が協働し、理想的な社会を構築する試みが展開された。中でも大正新教育実践校を核とする教育運動型学園

²⁷ 今昔マップ on the web（2024年6月29日アクセス）より筆者作成。

<https://ktgis.net/kjmapw/>

町は単なる住宅供給ではなく社会実験としての郊外の意義を提示した象徴的事例であった。教育理念と住宅開発が重なり合うことにより、風土に根ざした生活空間に理念が埋め込まれ、武蔵野におけるオルタナティブな実験郊外が具現化したといえる。

8. 1920～30年代：風土に根ざした近代建築の実践

前述した郊外住宅地には同時に近代建築、とりわけインターナショナル・スタイルに代表されるモダン・ムーブメントの建築が建設された。1920～30年代の武蔵野地域には、モダニズム建築の重要な実作が集中した。現存する同時代に竣工した重要な建築物をDOCOMOMO Japan 選定建築物300選より抽出すると、以下が挙げられる。すなわち、東京女子大学（アントニン・レーモンド設計、1924-38年）、浴風園（内田祥三・土岐達人設計、1926年）、矢田部邸（遠藤新設計、1928年）、自由学園南沢キャンパスおよび南沢学園町（遠藤新・楽・陶設計、1929-67年）、三岸アトリエ（山脇巖設計、1934年）、赤星鉄馬邸（レーモンド設計、1934年）、馬場氏烏山別邸（吉田鉄郎設計、1937年）等である。これら建築の多くに共通するのは、フランク・ロイド・ライトのプレーリースタイルやル・コルビュジエの近代建築の理念に結びつく水平性や開放性を備えたモダン・ムーブメントの建築の特徴を体現している点である。武蔵野地域の平坦な地形は、プレーリースタイルの成立背景であるアメリカの平坦な草原と共通性を持ち、建築と風土との共鳴を可能にした。その結果、これら建築物が武蔵野の風土と響き合い、内向的で静謐な生活空間を創出した。いずれも風土との調和を意識しつつ、モダニズム建築の合理性と機能性を追求した点で共通している。

9. 1940年前後：武蔵野都市計画等による理念郊外の制度的基盤化

1930年代にかけて、武蔵野モダニズムの特徴として抽出されうる郊外住宅地や近代建築が構築されていった。しかし社会情勢が第二次世界大戦に向けて変容すると、新規の郊外住宅地や近代建築の開発は停滞した。そのような状況下で1940年、都市計画法に基づく「武蔵野都市計画」²⁸が制定された。1940年12月9日、都市計画東京地方委員会で可決された武蔵野都市計画は、「従来の比較的自由主義な都市計画を一擲して国土、地方計画といふことを多分に加味した初の統制都市計画」²⁹と位置付けられた。まず、1939年に武蔵野町、三鷹町、小金井町、田無町、保谷町の54.87平方キロメートルで都市計画区域決定がされ、1941年には道路、広場、公園の計画と

²⁸ 『土木技術』第2巻第5号（1941年5月）：34-38頁。

²⁹ 『都市公論』第24巻第1号（1941年1月）：124-125頁。

用途地域の指定が行われた³⁰（図10）。計画区域では、防空と保健の建前から市街地建築物法及び都市計画法を強度に適用し、街路網の統制、地域性、土地区画整理、公園等を推進した³¹。対象地域は「近時交通機関の發達と資本主義工業の大東京近郊への蝸集とに因つて各種工場工業雑然と林立し廣く人口に膾炙せられたる武蔵野の自然美も漸次崩壊せられんとする元凶にある。仍て今にして何等か之が對策を講ぜざれば各種工場工業雑然たる陋巷の密集地帯を現出し、往來の武蔵野ヶ原の風」³¹であり、その理念を「大東京、近郊特に西郊に接着せる當該地方に蝸集する各種工場工業を統制すると共に、武蔵野の風致の保護並に其の助長をして全からしめんとする」³²とした。つまり、軍需都市化する近郊武蔵野を、武蔵野の自然美を残しつつ、工業都市としての発展もある程度加味した都市として統制するということであった。具体的には、（1）街路網の組成、（2）諸施設の配備、（3）街路広場の設置、（4）積極的都市計画と消極的都市計画のうち、消極的都市計画としての位置付け、これらが計画された。国策に関連していたとはいえ、民間である中島飛行機武蔵製作所がその都市計画画上重要な位置付けとされた都市計画であった。なお、戦後、1947年に武蔵野町が市制を施行、その後1950年に三鷹が、1958年には小金井が市となり、残る田無、保谷も1967年に市制を施行し、各市が独立した都市計画区域を形成し、1967年の時点から武蔵野都市計画は武蔵野市域（当時の面積は11.03平方キロメートル）のみで構成されるに至った³³。

このように、武蔵野都市計画では、用途地域指定、自然環境保存、公園整備などの制度的措置を通じて、理念的郊外を維持する仕組みが整えられた。ここに、ボトムアップ型で構築されてきた郊外住宅地という文化的実践と、行政によるトップダウン型の制度的支援が交差し、日本近代都市形成の一端が現れた。制度的基盤の整備は、武蔵野モダニズムを一過的な理想に終わらせず、持続的な都市文化として定着させる役割を果たそうとした。

10. 結論：「武蔵野モダニズム」構築と歴史的環境保全に向けて

本稿の検討を通じて明らかになったのは、武蔵野モダニズムが風土・理念・空間という三層の重なり合いの中で形成された歴史的環境である、という点である。具体的

³⁰ 武蔵野市編『武蔵野市百年史 続編 記述編』（武蔵野市、2011年）、895頁。

³¹ 『都市公論』第24巻第1号（1941年1月）：124-125頁。

³² 東京市町村自治調査会編『多摩都市計画史』（東京市町村自治調査会、1999年）：35-36頁。

³³ 武蔵野市編、前掲。

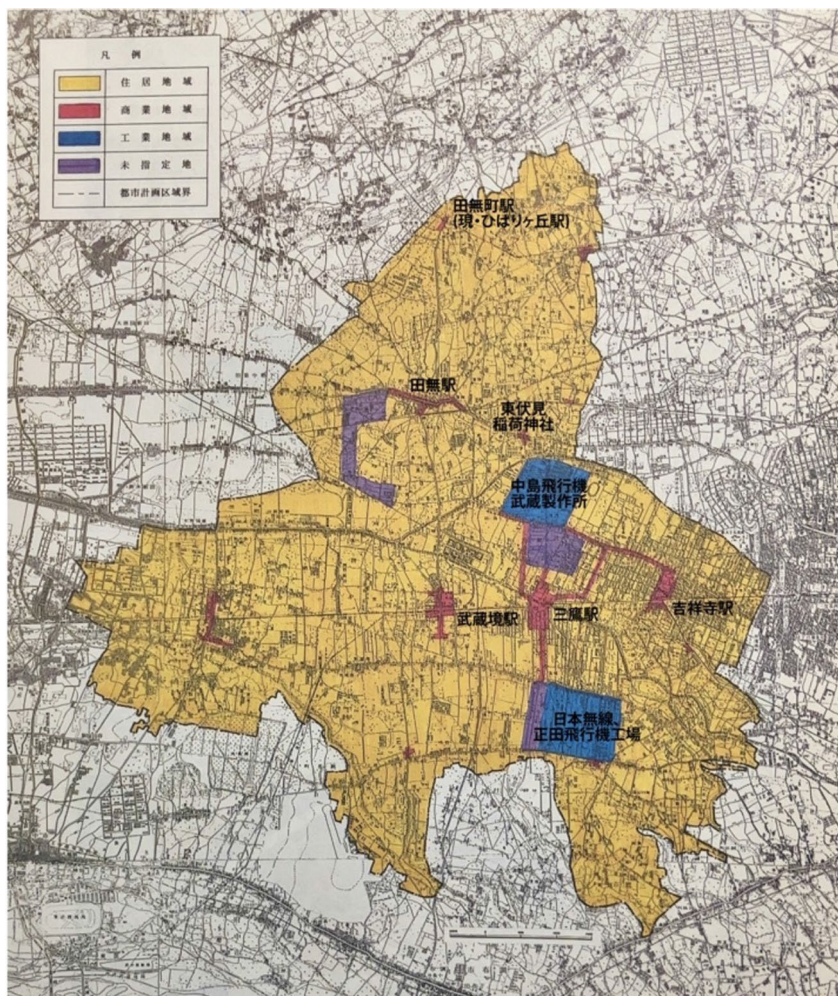


図 10：『武蔵野都市計画用途地域図』（1941 年 1 月 11 日告示）³⁴

に、武蔵野地域における都市・建築を通じた地域性獲得の経緯を整理すると以下の通りである。

³⁴ 東京市町村自治調査会編，52 頁，より筆者作成。

- 1900 年前後、武蔵野の地理的特性を背景に、国木田独歩『武蔵野』などを通じて武蔵野に文化的風土が生まれた。
- 1910 年前後、キリスト教系大学校建設計画を起点に東京圏に郊外住宅地開発の萌芽が生まれ、田園都市や新教育といった理念が海外から受容された。
- 1920 年代以降、新中間層の勃興を受け皿に、関東大震災を契機とし、郊外住宅地開発を通じて理念が顕在化した。特に、大正新教育実践校による教育運動型学園町では、田園都市と大正新教育の理念が融合し、理想的な社会や環境を目指す実験郊外が模索された。
- 1920 年代後半～30 年代には、水平性や開放性を備えた近代建築が武蔵野の地勢と響き合い、風土に根ざした建築群が展開した。
- 1940 年前後、武蔵野都市計画により制度的支援が加わろうとし、ボトムアップの文化的実践とトップダウンの制度的支援が交差した。

以上を通じて、武蔵野モダニズムは、風土・理念・空間が重なって成立したオルタナティブな近代化という実験郊外といえよう。

総合的に見ると、武蔵野モダニズムとは、地理的風土、文学的表象、教育と田園都市理念、建築的实践、制度的基盤が重層的に重なり合い、1920～30 年代の東京西部に形成された地域的モダニズムである。それは単なる建築様式の問題ではなく、都市と建築を通じた地域文化形成の試みであり、理念を実践に移した実験郊外として歴史的意義を持つ。

本稿の試論を踏まえ、今後の課題は三つに整理できる。第一に、武蔵野モダニズムを他地域のモダニズムと比較し、全国的・国際的文脈で位置づける。第二に、住民主体の歴史的環境保全や利活用の実践を分析し、継承の方法論を探る。第三に、文化政策の観点から、武蔵野モダニズムを現代都市に活かす方策を検討することである。

本稿はあくまで武蔵野モダニズムの輪郭を提示する試論にとどまるが、その詳細な解明は、地域文化形成と歴史的環境保全の新たな方法論を開くとともに、都市文化研究に新たな地平を拓くことが期待される。

**Toward a Framework of “Musashino Modernism” :
Regional Cultural Dimensions of the City and Architecture**
by YUTA GENDA

This research note presents a preliminary framework for analyzing a regional form of modernism that emerged on the Musashino Plateau in western Tokyo during the 1920s and 1930s. Termed “Musashino Modernism,” this form of modernism is examined as a historical environment shaped by the overlapping layers of climate, ideas, and space. By tracing the chronological development of suburban housing, educational movements, modernist architecture, and urban planning schemes, the background and cultural significance of Musashino Modernism are discussed from the perspectives of urban and architectural history.

Several key stages are identified. First, around 1900, the geographical features of Musashino and literary works such as Doppo Kunikida’s Musashino generated a shared cultural landscape. Second, in the 1910s, proposals to establish a Christian university stimulated early suburban land development, while ideas of the Garden City and progressive education were introduced from abroad. Third, in the 1920s, the rise of the new middle class and the impact of the 1923 Great Kanto Earthquake accelerated suburban housing development, consequently leading to the formation of “educational movement-type garden towns” by schools such as Seikei Gakuen and Jiyu Gakuen, which combined pedagogical ideals with urban form. Fourth, in the late 1920s–30s, modern architecture by Antonin Raymond, Arata Endo, and others emphasized horizontality and openness, which resonated with the Musashino landscape. Fifth and finally, around 1940, the Musashino City Planning scheme institutionalized aspects of suburban development, ultimately intertwining bottom-up cultural practices with top-down regulatory frameworks.

Thus, Musashino Modernism can be characterized as an “experimental suburb,” which is an alternative form of modernization where climate, imported ideals, spatial practices, and architecture intersected. This was not merely a stylistic phenomenon but an attempt to form a regional culture through urban and architectural practice. Tasks for future research include situating Musashino Modernism within broader contexts, analyzing resident-led conservation practices, and considering its implications for contemporary cultural policy.

(Project Academic Specialist, The University of Tokyo /
Part-time lecturer, Aoyama Gakuin University)